#### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	石沢元晴著 現代米ソ経済論
Sub Title	
Author	加藤, 寛
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.7 (1961. 7) ,p.607(91)- 608(92)
JaLC DOI	10.14991/001.19610701-0092
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610701-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

されている。 には不十分であることは云う迄もない。 と国際収支の問題がより明確にとらえられ、 しかし理論的発展はなお統一的な把握を行なわしめる 実証化のこころみもな

われる。 し、系統立てることによって、 に一層の検討が必要であり、また本書全体に関して、 したがって経済成長という点に本書が中心をおくためには、さら もっとすっきりしたものになると思 もう少し整理

だが、このような問題点があるにしても、 経済成長の観点から国

昭和三十六年四月十五日刊・A5・三七六頁・七八〇円) 期待がよせられる。〈著者は中央大学経済学部助教授・中央経済社・ は 国際金融面からの分析が不足しているように思 われる が、土屋氏 の国際収支の動向分析には、新しく示唆される点が多々ある。 国際収支表のすぐれた分析と第二編における資本蓄積の所得・価格 際収支問題の把握につとめた点では画期的であり、とくに第一編の メカニズムの指摘および第三編の国際収支の不均衡の分類、わが国 これに関する新しい著作を計画されているとのことで、大いに また

### 新 刊 紹 介

・エヴラル

### 『大規模な ついて ペ ファ N ۵. ≫ K

パリ周辺について示される。 の論文ではそうした『ファルム』の具体像が 紀にはいってその規模を拡大していった。こ ルミエ』と呼ばれた。『ファルム』は十八世 た。『ラブルール』 はそのことにより 『フェ 産とみなし、経営を『ラブルール』に委嘱し 彼の生活の今後を支える重要な基礎たらしめ った。その過程で 領主は 土地を買戻し、『フ ようとしたのであった。領主はそれを直轄財 人ないし武人として宮廷に出仕するようにな もはや在地しない。彼は村の生活を捨て、 ル ム」とした。そしてこの『ファルム』を 七世紀にはいれば領主はこれまでと違い

一つの『ファルム』は一七〇五年にその規 六六アルパンであった。し パンにまで拡大している。であった。しかし一七六九

> に帰せらるべきことであった。いた。これはもっぱら当時の農業経営の仕組 だしい場合には三ないし四の教区に分散して まの状態でいることが多かったのである。甚 収めることは困難であった。地片は散在 認められる。しかしこの段階で完全な成功を いたわけではない。統合しようとする努力は を構成する地片がすべて一ヵ所にまとまって 〇ヘクター ム」の平均規模は一八〇へクタールから二五 う。そして十八世紀末にはこれら『ファル た。従って収奪はかなり厳しかったといえよ には二〇七アルパンの規模にまで拡大してい アルパンの規模があった。しかし一七七八年 た他の『ファルム』は一七二七年に一五一 ルに達した。しかし『ファルム』 のま

された。 し牧草は かなり乏しい。」 農学者のそうしされてい たわけである。「穀物は多い。し 輪作のなかに休耕が折込まれていたのであっ 約のなかで耕作に際し休閑を折込むよう指示 かに閉込められて みられなかった。農業経営は伝統的な枠のな た。 休作地を廃止した事実は例外としてしか 当時パリ周辺では三圃制が支配的である。 新農法への移行は依然として危険視 いた。 『フェルミエ』は契

> La "Les grandes fermes entre Paris et 続いてその経営を追う。 規模な展開を示す。端的にいってパリ周辺で は工業作物の栽培が殷賑を極めた。 く、もはや自明のところであろう。新農法は大 このことが旧い状態を崩壊に導く直接の契機 となったことは、著者の指摘によるまでも れば休作地で甜菜が栽培されている。そして 批判が的中するような農業の状態がほとんど XXXV pp. 210-226. ¥.460. 九世紀まで続いたとみなければならない。 かし多くの曲折を経て一八四〇年以降にな Beauce," Annales de Géographie, Fernand Evrard, 著者は引 ts

-渡辺國廣

\*

×

### 石沢元晴著

## 『現代米ソ経済論』

経済競争が戦後における米ソ冷戦のターミナ七章から成る。まず第一章において、米ソの の世界経済の展開の起点となることを明らか ルとしての重要な現代史的意義をもち、今後 これはまことに便利な書物で ある。 本書は

る 来の米ソ比較論が静態的な計数判断の方式で どのような政策をとり、か おこなわれており、経済競争に打ちかつべく そ と経済圏形成の競争という面から検討する。 資本主義経済の自己修正とソビエト社会主義 経済の自己修正が及ぼす影響を、低開発援助 さらに第六章において、このようなアメリカある程度認めざるを得ない事情を探求した。 経済 能を媒介とした計画経済的要素ともいえるも し、第四・五章において、ソビエト社会主義のを多分に導入せざるを得 ない 事情を 解明 劣らぬ経済成長を達成するためには、国家機 費至上主義的傾向 資本主義経済が、 にし、 して最後に、日本経済の基本的方向を考察 Ь その穴を埋めよう いる。 自由経済的要素ともいえるものの混在を がこれまでの過度の蓄積第一主義の強行 たらした経済各部門間のゆがみを是正し かに従来の研究は、 う いで第二・三章において、アメリ 動態的な研究がなされて 本書は、著者の考えによれば、従 内在する宿命的な矛盾と消 とを克服して、 とする意図をもつも つとろうと ソビエト いない して の 0

経済力の数字測定

集してくれたという点で、まことに百科辞書ソの経済的・政治的対立の様相を新聞的に収は決して目新しいものではない。が最近の米い。このような意味で本書の意図するところ 見解の 解を並列してある 5・三二四頁・六五〇円) 的に便利な書物である。 究がなされていることが忘れられてはならな 基礎にして実に多くのすぐれた政策判断の研 究方法は、ソ連という統計的秘境の分析いたようであった。しかし実はこのようの研究が、アメリカ・ソ連の学者に共通 (昭和三十六年三月刊・ダイヤモンド社・A B にとられ 述べられていないことが気にかかる。 た手段であり、 のに、それに対する批判的ある。ただ、いろいろな見 ソ連の学者に共通し 、このような研究を計的秘境の分析のた |加藤 ような研 寛| 7

### 永 原慶二著

# 『日本封建制成立過程の研究』

三〇年、東京大学出版会)に お い て わが国慶二氏は、さきに『日本封建社会論』(昭和史学界に新鮮な空気を送り込まれて来た永原史学界に新鮮な空気を送り込まれて来た永原

名主・在家=過渡的経営体─(分解)→農奴列を不十分であるとして、班田農民→農民的られて来た奴隷→コローヌス→農奴という系は、農奴制展開の基本コースとして従来考え として捉えられたのであっ の内部における農奴制の展開をメルクマ れ、その古代的性格を強調され、封建制はそおく古代的土地所有形態の一段階」と規定さ 建制についてはいろいろな議論が多くの論者 学会報告三篇を載せて居られる。 I 部 おいて荘園制を「家父長制的奴隷制に基礎を しているが、氏は前著『日本封建社会論』に によって主張され、 奴制の 政治と経済、 に感銘と刺戟を与えてきた。 な担い手の一人として氏の活躍は多くの まとめ、 たが、 い。戦後における社会経済史学の発達の重要 既に定評のあるところで、 建社会の形成と発展とを綜括的に予察さ |報告三篇を載せて居られる。わが国の封二―第Ⅱ部に十一篇の論稿を、第Ⅳ部ではにと経済、第Ⅳ部補論、索引からなり、第三の成立について、第Ⅲ部荘園制解体期の 第Ⅰ部荘園制の性格について、第Ⅱ部農協と刺戟を与えてきた。この書は、 序 公刊された。氏の鋭い分析と洞察は 従来発表されて まさに百家争鳴の観を呈 た。本書におい 今更多言を要しな 人 7 n

5 分に満足させるものとして高く評価され (岩波書店・A5・本文五三三頁・ О

### 小 林 経済昇 学の 著 形 成 八時代』

ワルド、 ぎって、 期 (はしがき)、 富論』の成立事情をあぶり出そうとつとめ」 ー、ヤング、 いわば横割りの学史記述をおこなって、 ろから『国富論』の刊行までの四半世紀にか 載された啓蒙的論文とはいえ、かなりの考証るに至った。これは、「経済セミナー」に連 こにまたこの方面について解体期の研究も最近活潑と と理論水準を有する特殊研究の集成である。 する学説史の研究はすでに数多く、 内容は、「対象とする 時代を 一七五〇年ご のイギリス経済学界の事態を復元させ、 が国において、 の研究も最近活潑となっているが、 ハリス、テンプル、タッカー、 この時期へいわゆる重商主義解体 スミスを取りあげており、 ヒューム、スチュアー アダム・ の独自の研究を得 ス ス 重商主義 また ケ オズ 国 iLi ネ ح

新の

個別的研究の成果を十分に取り入れ、

阻

は殆んと不可能事である。しかし、最

しての性格を持っている本書を概略

る事

論文集と

た上で)たものであるとは言いながら、

専門

的側面を重視されているのである。

主題にそって綜括され

(若干の修正を施し

9

b

そこに古代社会から封建社会への過渡

ji.

る古代社会的性格を認めて

4的性格を認め――従って荘園体制荘園体制については、それが有す

そ

0)

の体制にその典型を見出す)の存在を認め、

の分解の上に封建的階級関係成立を求める

いう過渡的経営体(十二世紀の寄進地系荘園

交替関係を否定してその間に名主・在家と

〇 〇 円 〇 〇 円

**|速水** 

崩壊=農奴制の

体制的成立という直接

を設定さ

いわ

ゆる総体的

のである。

期を時代区分の上から古代末期となし

j

社会構成の基本をなしている平安末・鎌倉

成」を付論としている。た「ペティからスミスキ その 代 の労働価値論の歴史を簡潔に叙述し からスミスまで 商品把握の形

であきらかにすることが不可欠な作業となっ済理論上の関連を、その継承と批判との両面がその先人および同時代人との間にもった終での経済学の諸文献にできるだけ通暁し、彼 れよう。 以前の理論的諸源泉のほぼ完全なプー いう常識から免れる」ことが必要だと感じら とを考えると、たしかに、「『国富論』がそれ 階をスミスに強く印象づけたというようなこ 示されていないがタッカーは機械と工場の段 論敵であるがゆえにスミスは故意にスチュア争点を鮮かに再現することに成功している。 た。 がそれぞれ詳細な個別研究を基礎としている と自認するだけあって、「国富論」当時の論 τ れていない書物」である。 散在してい トに対する論及を避け、「国富論」には明 の学史的考証が存外不十分にしかおこな 著者によれば、「『国富論』 この書は要約した記述ではあるが、著者 それ羊目の書は要約した記述ではあらず、の書は要約した記述ではあらず、の書は要約した記述ではあらず、の書は要約した記述ではあらず、の書は要約した記述ではあらず、 その他問題になりそう る。 つの指標であると共に、 まことに著者のこれま そとで、 な指摘は それにつ スミスま ルだと ر ا ا 彼

る。氏の著書に示されるものはかかる要求を能力と共に、それらを綜合する力を必要とす

ただそれ

にはすぐれた個別的研究の分析

新説の洪水という混乱の中か

5

漸く新しい

上に綜合が始められたと言う事ができ

を考えてみると、戦後における旧権威の失墜、 嚼した上で一つのまとまった業績として本書